

宮崎県総合計画審議会第4回専門部会

(人づくり部会)

会議録

日時 令和5年1月30日(月)

14:00~16:00

場所 宮崎県防災庁舎 防73号室

○事務局

それでは定刻となりましたので、ただ今から、宮崎県総合計画審議会の人づくり部会を開催させていただきます。本日は第4回目の専門部会となります。

まず、資料の確認をお願いいたします。次第、部会名簿、配席図の他に、カラーの横版の資料が本日の説明資料の中心になりますので御確認ください。それから、参考資料として、前回の会議録と昨年9月に策定した新しい長期ビジョン、それと現行の総合計画の冊子をお配りしておりますので、これらは議論の中でお使いいただければと思っております。資料に不足のある方はいらっしゃいませんか。よろしいでしょうか。

それでは議事に入らせていただきます。これからの議事につきましては、部会長に進行をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○藤本部長

はい。皆さんこんにちは。部会長の藤本でございます。8月8日の第3回以来ということで、お忙しい中お集まりいただきまして、ありがとうございます。どうぞよろしくお願いいたします。

ではまず本日の会議録の署名委員を指名させていただきます。

本日御出席いただいております委員と専門委員の中から、宮本委員とウォーカー専門員をお願いと思いますが、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。ありがとうございます。では、よろしくお願いいたします。

では早速ですが、議事に入りたいと思います。前回は全体会の後の部会でしたので、1時間弱ぐらいの時間でした。本日は最初から最後までありますので、思う存分、御意見を出していただければと思っております。

それでは事務局の方から前回御意見等いただきました、アクションプランの骨子案が出ておりますので、その説明をお受けした後に議事の方に入りたいと思います。

では事務局よろしくお願いいたします。

○事務局

総合政策課の竹松と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

配布しております「宮崎県総合計画アクションプラン骨子（案）」について、説明させていただきます。

こちらを説明後に、このアクションプランについて、優先的、重点的に取り組むべき内容などについて、委員の皆様から御意見をいただけたらと存じます。

早速ではございますが、ホチキスどめのこちらの資料の1ページ目を御覧ください。

次期アクションプランの位置づけとしましては、昨年9月に策定しました長期ビジョンの目指す将来像の実現に向けて、今後4年間で重点的・優先的に取り組む施策を示す実行計画として策定するものです。

次期アクションプランの構成としましては、これまでの4年間の取組状況や知事の政策提案などを踏まえ、資料の右側にありますように5つの重点プログラムを設定しております。

1番目がコロナ禍・物価高騰等からの再生・復興、2番目が希望ある未来への飛躍に向けた基盤づくり、3、4番目が少子化対策や社会減対策といった人口減少対策、5番目が産業政策という構成にしております。

これまでのアクションプランとの違いとしましては、コロナ禍や物価高などからの再生に加え、長期ビジョンで整理した5つの要素、持続可能性やデジタル、先端技術といったものを取り入れつつ、希望ある未来への挑戦として、スマートシティやゼロカーボンシティ、ウォークアブルシティなどの実現に向けたチャレンジングな取組を掲げたところです。

2ページ目を御覧ください。1つ目のプログラム「コロナ禍・物価高騰等からの宮崎再生」であります。

長引くコロナ禍や物価高騰等により大きな影響を受けている県民の暮らしや県内経済を守るため、医療提供体制の確保など感染症対策にしっかりと取り組むとともに、創設した「宮崎再生基金」を活用し、生活困窮者などへの支援をはじめ、観光や公共交通の需要喚起など、県民生活や経済活動の本格的な回復に向けた機動的かつ効果的な施策を展開し、宮崎県を再び成長軌道に乗せていきたいと考えております。

重点施策としては、①県民の命や健康を守る地域医療・福祉の充実として、病床確保や迅速な検査体制の更なる充実、へき地医療の機能維持など、②県民生活・地域経済の早期回復では、コロナ禍から生じた新たな課題の把握や分析を進めるとともに、子どもの貧困・ヤングケアラーへの対応、③魅力あふれる「観光みやざき」の創生では、G7宮崎農業大臣会合など大規模なイベントを契機とした本県の魅力発信や需要喚起などに取り組みます。

このプログラムの主な指標としましては、医療満足度や観光入込客数などを想定しております。

3ページ目を御覧ください。2つ目のプログラム「希望ある未来への飛躍に向けた基盤づくり」であります。

人口減少をはじめ、デジタル化の進展や世界的な脱炭素化の動きなど社会情勢が大きく変化する中、安心と希望ある未来に向けて、スマートシティや脱炭素地域、未来技術の導入検討など新たな社会づくりに果敢に挑戦するとともに、交通・物流ネットワークの充実や県土強靱化対策など本県が持続的に発展していくための土台を創っていききたいと考えております。

①希望ある未来への挑戦として、様々な分野のデータ連携によるスマートシティの形成や、100%再生可能エネルギーで賄う脱炭素の地域づくり、「歩いて楽しめる」まちづくり、多様な人々が活躍できる共感・共生社会づくり、シェアリングエコノミーやサステナ

ビリティ経営の推進、次世代モビリティやメタバースといった未来技術の導入検討など、実現に向けてはハードルの高い取組を設定したところです。

次の4年間で実現することは難しいかもしれませんが、将来を見据えた時に、これらの取組を少しずつでも前に進めていくことが希望ある未来につながっていくものと考えています。

このほか、②交通・物流ネットワークの維持・充実として、持続可能な地域交通網の構築や国際航空路線の定期便の早期再開に向けたチャーター便の誘致など、③命や暮らしを守る災害に強い県づくりとして浸水被害防止・軽減に向けた河川施設等の整備などに取り組みます。

このプログラムの主な指標としましては、地域間幹線バスの運行形態等の見直しや河川整備率などを想定しております。

4ページ目を御覧ください。3つ目のプログラム「みやぎきの未来を創る人材の育成・活躍」であります。

本県の大きな課題である少子化対策を再構築し、合計特殊出生率や出生数増に向けた取組を強化していきます。併せて、宮崎で生まれた若者たちが地域の一員として郷土への誇りや愛着を持ち、みやぎきの未来を切り拓く力として成長するとともに、女性や高齢者、障がい者、外国人など様々な人々が集い、個性や能力を発揮できるゆたかな県づくりを進めたいと考えております。

主な取組としまして、①子どもを生き育てやすい県づくりに向け、外部有識者等による議論を踏まえた合計特殊出生率向上に向けた取組の強化、②未来を担う子どもたちの育成としてグローバル教育やESD教育の推進、③一人ひとりが自分らしく生き生きと活躍できる社会づくりとして女性が働きやすい職場環境づくり、④健康・学び・スポーツ・文化の充実では健康経営の更なる推進やスポーツの場所と機会の提供などに取り組みます。

このプログラムの主な指標としましては、合計特殊出生率やふるさとが好きだという児童生徒の割合などを想定しております。

5ページ目を御覧ください。4つ目のプログラム「社会減ゼロへの挑戦」であります。

これからの時代の担い手となる若者・女性の県内就業の促進や、移住・関係人口の拡大など社会減ゼロの実現に向けた取組を展開するとともに、人口減少下にあっても、生活に必要な機能・サービスを維持し、全ての県民が安心して住み続けられる持続可能な地域づくりを進めたいと考えております。

主な取組としましては、①若者・女性の県内就業、県内定着の促進に向け、若者・女性等に魅力ある雇用の場を創出するための積極的な企業誘致など、②みやぎき回帰の促進・定着については、ワーケーションやグリーンツーリズム等の推進、③安心して住み続けられる持続可能な地域づくりではデマンド交通など安心できる移動手段の確保などに取り組みます。

このプログラムの主な指標としましては、県内高校新卒者の県内就職割合や移住政策

による本県への移住世帯数などを想定しております。

6 ページ目を御覧ください。5 つ目のプログラム「力強い産業の創出・地域経済の活性化」であります。

デジタル人材など本県産業を支える人材の確保をはじめ、スタートアップ企業の育成や先端技術産業の振興、さらには、中小企業等のデジタル化やゼロカーボンへの対応など、経営基盤の強化や生産性向上に向けた取組を展開していきます。また、本県の強みである豊富な農林水産資源や地域特性を生かした産業の一層の高付加価値化・成長産業化を促進したいと考えております。

主な取組としましては、①産業を支える多様な産業人材の確保・育成として、ひなた MBA の充実等によるリスクリングの推進など、②新産業の創出と地域経済の活性化ではスタートアップ企業の育成や新事業創出の支援、③稼げる農林水産業への成長促進として、スマート農林水産業の促進や、燃油や化学肥料、飼料などの海外資源に依存しない農業への転換等に取り組みます。

このプログラムの主な指標としましては、県内総生産や1人当たりの労働生産性の向上率などを想定しております。

以上がアクションプランの骨子案の概要でございます。説明は以上です。

○藤本部長

はい。ありがとうございました。

それでは、本部会は人づくり部会ということですので、進め方といたしまして、今の説明がありました資料4ページの「みやぎき」の未来を創る人材の育成・活躍というところを中心にお話を進めていければと考えております。

その前に、前回8月8日の会議録がお手元にあるかと思います。少し目を通していただいた上で、議事に入りたいと思います。少し時間をとりますので、御覧ください。お願いいたします。

よろしいでしょうか。では、議事の方に入っていきたいと思います。

お手元に現行のパンフレットがありますが、こちらも参考になるかと思います。中身を見てくださいながら、御意見、御質問等いただければと思います。

では、先ほど申し上げたとおり、4ページの人づくり部会に関連する事項から入って参りたいと思います。それぞれの専門の分野で、もちろんそこから広げながら御意見いただければと思います。

では、質問も含めて、どなたか。どこからでもよろしいかと思います。大きくは4項目ございます。御質問でも構いませんので、この骨子案についていかがでしょうか。

教育分野の方がお見えですので、鮫島委員。この教育、育成という部分でいかがでしょうか。

○鮫島委員

それでは、育成の一つ手前にある少子化に関して、産婦人科医であるということから、一言申し上げます。

宮崎県の合計特殊出生率は全国で2番目ぐらいの高いところに位置しておりまして、沖縄とか南九州は結構高くなっています。この課題は日本全体の大きな問題であって、宮崎県だけでどうにかできるかということに関しては非常に難しいと思います。

それを除いて、では、将来の子どもたちに何ができるのかということについては部会長もおっしゃっていたように、やはり教育だと思います。でも、実際教育では何か面白いことができないか、こういう良いことができないかと思いついたとしても、多分1年後は日本中に行き渡って、同じことだったら全体にしましよとなるのが、今の状況だと思います。私が言うのもなんですが、八方塞がりのようで、一つだけ解決することはできない、全部をどうにかして解決していかないといけない問題だろうと思います。

その意味では、大学で何かしてそれがうまくいくということではなく、高校でもそうかもしれない。多分、幼稚園、小学校、中学校その付近からの宮崎愛や日本愛をいかに育てていくのかだと思います。

そこで少し話題になるかどうか分かりませんが、最近うんっと思いましたのは、アフガニスタンからの戦争避難民がたくさんおられて、宮崎にも宮崎大学の大学院を卒業されたという方が7家族、全部で40数名来られました。そして、その方々が同じように日本に来られた避難民の人たちとネットワークを繋ぎながら、今後どうしようかということ動いておられました。九州の中で熊本にいた人が福岡の方に行くとか、岩手にいた人たちが他のところに行くとかはあったのですが、宮崎では、7家族の皆さんが宮崎に残るということを決められました。

そこで私は7家族のうち6家族の人たちに、何が良かったのですか、とお聞きしたところ、2つのことを皆さんおっしゃいました。1つは、4月からの就職先を決めていただいて、そこで経済が安定する。それと、子どもたちが宮崎を好きになったと。宮崎で友達ができ日本語が上手になり始めて、その友達とずっといたいと。避難民の方々は40代が一番多いのですが、自分のこと以外にも、やはり子どもたちの将来を見据えて平和なところでどうやって生活するかということのみますとやはり、外国の方を受け入れるとか、そういう方への日本語教育とか様々なこともあろうかと思いますが、まだ10代にならないお子さんが一番多いので、そういうところからの非常に親密な関係が将来的には一番良いのかなという気はいたします。

○藤本部長

ありがとうございます。ちょうど会が始まる前に、ウォーカー専門員と同じような話をしたところでした。ウォーカー専門委員いかがですか、大学の立場から。

○ウォーカー専門委員

外国人の人口がどんどん増えていって、就職先をどうするか、社会にどう溶け込んでいただくかという課題は、多分これからも出てくると思いますが、成功例があって良かったなと思います。

そういうことも含めてですけれども、宮崎を愛するというその気持ちをどこまで育てることができるかということが大きな課題かなと思います。宮崎を愛するという事は、まず皆さんに宮崎を知っていただくということが大事。地域として、別に宮崎市内だけではなく綾だったり、西米良だったり、本当に宮崎を深く研究、探検していただく機会を与えることが大事。それは外国人だけに限ってではなく、宮崎の若者もそうだと思います。

どこまで宮崎のことをよく知っているか、うちの大学でも、宮崎をよく知っていただくために日本の地域文化という科目を作っていて、宮崎に限るわけではないのですが、綾や都城に初めて行ったとか、こんな良いところだったのかと気付く人はかなり多い。そういった意味では未来を担う子どもたちを育てるためには、本当に宮崎を愛していただく、宮崎を知っていただくということも、大事な視点の一つかなと思います。

それと、小学校、中学校、高校の現場を見ていると、学校ですから、文科省から言われたことをいかに早くやっていくかという雰囲気が現場にあって、本当にやりたいと思ってやっていることが少ないと思います。たくさんやらないといけないことがある中で、次から次に新しい政策が出てくるものですから、先生方も疲れてくるでしょうね。

でも、先生たちの意識がすごく大事だという気がします。地域や大学等との連携ももちろん大事ですけれども、学校現場、先生たちの考えをどこまで変えることができるか、とても大きな課題が出てくるのではないかなと思います。学校自体がどうこれに対応していくかということが一つの課題だと思います。

○藤本部長

はい、ありがとうございます。松本委員、PTAの立場からいかがでしょうか。

○松本委員

宮崎市の教育フォーラムに参加させていただいて、先生方の意見もいろいろお伺いしたのですが、先生方はどうしても異動がありますよね。まず、地域を知って子どもたちを知って親を知る。教育をしながら課題が山積みで、でもその中でも地域を愛して子どもたちに教育をしていく。本当に大変だなと感じたので、もう少し先生たちが希望する学校で柔軟に働けたら、もう少し地域を愛した教育を提供できるのかなと思いました。

それと、私はUターンしてきたのでとても感じるのですが、宮崎にずっと住んでいらっしゃる方があまりに地域を好きでないというか、地域への愛着が薄い。私も宮崎に帰ってきて、なんて素晴らしいところなのだろうと思って、PTA会長とかもやってみたいな、ま

ちづくりとかにも参加したいなという気持ちが湧いた。乗って来ない方がやはり多い現状にありますので、何とか興味のない方たちに魅力を伝えていくということがとても大事だなと考えています。

○藤本部長

はい。ありがとうございます。昨年まで教員でしたので、正直申し上げると戸惑っています。もう何年も前に出たのですが、働き方改革、これに今、部活動の改革、ICT。これを言うといけないのかもしれませんが、手が回らないのも本音の一つだと思います。

若い先生方は高校、大学でそれを学んで慣れて入って来られますけど、私たちみたいにだいぶ上の方はなかなか切り換えがきかなかったということも本音の話。授業で教科書や資料を見ながら、板書して教えていくというこのスタンスしか経験していない年代と、いや違います、みんなで考えて答えを出していくんですよ、というこのギャップが戸惑いの一つ。これにタブレットを使いなさいと言われた時に、最初は訳がわからないですね。少しずつは浸透して参りましたけれども。

ですから、もう少し時間がかかるのかなと思っても、おっしゃるとおり、時間をかけすぎたらいけない、県全体の教育も遅れていくだろうと思います。ありがとうございます。

その他、教育だけではないですが、社会人として育ってくる若者たちを御覧になって、米良委員いかがですか。

○米良委員

教育、難しいですね。前回は私言ったと思いますけれども、とにかく答えが出ない答えを求めながらという形。結論から言うと、私は77歳です。こういう会議に私みたいな年寄りには必要ないと思います。それよりももっと若い方を出されて、若い方々の価値観は何なのかということ逆を教えてもらう方がいいのかなと。そうでなければ、教育のマッチングができないと思います。

この間、テレビを見ていましたら、裁判の番組で、先生はある学生さんをフェンシングのオリンピック選手にしたい。ところが本人は、オリンピックには興味がない、ただ好きだからフェンシングをやっているだけ。そして、結果的にその学生さんは罪を犯していく。でも、学生さんの中では罪を犯すということは妥当だと思っているわけですよ。自分が嫌いなことを押し付けられた、それに対する抵抗、そして罪を作る。その罪はごく当たり前ではないかと。逆に言うと、大人たちは理解してくれよ、と。これを裁判官と弁護士が、罪は罪だと教育しないとイケないという場面でした。

この先生は50代、学生さんは18から22という、このタイムラグはもうどうにもできない。我々の頃は、価値は3年ごとに変わると学校で習いました。今、3か月ごと、1年間で4回変わる前提ということ聞いたことがあります。その価値が4回変わるというのは何なのかといたら、例えばメールで単純に文を短くしていく、絵文字にしても短く

していく。もう1年前とは全く新しい言語などが出てくる。それが通用しない人たちは自分たちの友達ではないという感じを受けます。

ですから、そのような中で、この人材育成ということ、失礼な言い方をしますが、これからは先どこにはさみを入れるか、どこで切るか。切ったところから、スタートしてやらないといけませんが、やりながら時代遅れになっている。しかし、それは仕方がない、その犠牲は払わなければならない。捨てるのと拾うところの責任感の比べ方になるのかなど。

だから、先生方や大人たちも、じゃあ私が責任取りますから、ここからここまでは私に任せてくださいというぐらいないと。一番ややこしくて答えが出なくて、優柔不断で、ナーバスで、ポジティブで、もう様々な事柄がこの中に入っていますので、人づくりという問題についてはどこかで決断と勇気がいるのかなと思います。

少し長くなりますが、この頃、偶然という言葉が大好きでして、出会い頭で交通事故。会いたくない人に会うなど、とにかく神様の裁きかと思うみたいに、この1月だけでもいろいろあります。しかし、それは少しうがった言い方をしますが、結果的に私の過去が生んだこと。格好よく言わしていただければ、若干動き過ぎた結果そういうことになっているわけですが、動かなければ偶然はない。ということは、良いことも生まれない、チャンスも捉えられない。

だから、人づくり、ものづくりでも、社会づくりでも何でもいいですが、その行動力というか、誰かがするだろうというスタンス。どこかの誰かがアクションを取れば、他の県なら普通は出る釘は打たれる、出る釘は抜かれる。言い方を変えれば、自分が取って代わりたい。ところが宮崎と一緒に沈むというわけですよ。俺が代わりたい、やりたいのではない。あなたが騒ぐとこっちまでとぼつちりが来るから嫌だ、というのが論理。これでは宮崎は伸びない。何でかというと発信力がない、責任を取りたくない。言うのは言うが、言いつ放しということだと思います。ですから、失礼な言い方をしますが、人間というものをもう少し宮崎は深掘りしなければいけないかなど。

もう少し話をさせていただくと、この前優しい嘘という本を読んだ。介護施設の前にバスが止まらないベンチがありまして、夕方になると、そこのおじいさんが出てきてずっと待っていらっしゃる。なぜかと聞くと、今から私の家に帰るバスが来るから待っているのだと。停留所ではないからここには来ないよと言っていた。その後、絵に描いた停留所ができて、そのおじいさんにはバスが来るには少し時間がかかるから、部屋に帰ってコーヒを飲んで待っていたらと言うと、部屋に帰っていき、穏やかに時間が過ぎ去っていく。そういう優しい嘘があってもいい。

では、宮崎の中における例えば観光問題にしても、来月のWBCにしても、駐車場や乗り物の問題だとか、いろいろあります。この中でどういう優しい嘘をつけるのか。その嘘が本当にならなければならないし、納得、自分の考えが足りなかったなということが、どう伝わるかというこの社会性が、この全体像の中から出てくるのではないのかと思います。

す。ですから、アクションということと、それから、偶然に当たりたいというこの切なる願いと、あと一つは、何か役に立てればいいのにと思っている自分があります。

○藤本部長

ありがとうございます。宮崎にずっとおりますので、身にしみる思いです。県民性というものはどうしても出てくるものかなと思いつつながら、お聞きしておりました。

甲斐専門委員もいろいろと人には接しておられると思いますが、いかがですか。

○甲斐専門委員

私の活動は経済的に大変な御家庭の子どもたちへの学習支援や、学校に行けていない子どもたちのフリースクールみたいな形で居場所づくりをしています。資料の②未来を担う子どもたちの育成というところで読ませていただきましたが、学校に行けていない子どもたちに対しての新しい教育方法や学びの場が必要になってきている。それがどういった表現でここに反映されているかということが少し気になりました。

学校に関しては、塾に行っている子だったり、もう全くついていけない子だったり様々いる中で、先生たちがとても苦労していらっしゃるのもよくわかっています。先生たちにすべてを任せるというのも大変なので、そこに地域で活動しているNPOや、いろんな関係の方と手を組むという記載があると、先ほどの米良委員の責任、拾う責任と捨てる責任、その部分を一つで担うのではなくて複数の方で担っていけると、少しずつ人材育成に繋がっていくのではないかと思います。

○藤本部長

はい。ありがとうございます。事務局、もう少し深掘りできますか。

○事務局

はい、ありがとうございます。実はこの資料の文章は、私たちの作業の話でいうと、もう少し細かいことを書いている中から抜粋したものになります。ですから、様々なことを検討中であるのですが、どのように書き込んでいくか作業をしているところです。

今、甲斐専門員がおっしゃった、いわゆる学校のシステムの中での学びに苦労しているような子どもたちへの支援はとても大事なことだと思っています。もう一方で、子どもの貧困問題のような経済的な理由で困難を抱えている子どもたち、それから、学力的な面で、あるいは人間関係といったもので、困難な状況にある子どもたちをどのように、この政策の中でフォローしていくかというのは課題として考えておりますが、ここにはまだ書き込めていない状況です。

経済的な部分については、別の項目の中で子どもの貧困という言葉を出して、書かせていただいておりますが、今の学習支援のところはまだ検討中ということでございます。

○藤本部長

はい、ありがとうございます。人権にも非常に大きく関わってくるのだと思うのですが、宮本委員いかがですか。

○宮本委員

人権ということもありますが、学校教育にずっと携わってきまして、前回も言いましたけれども、やはり、将来への投資である子どもたちの育成への施策というのは最重要であると考えています。

前回私は、大まかには教育環境の整備と教職員のスキルアップという2点を言いました。それが大事なだけけれども、それを取り巻く環境があまりにも負のスパイラルに陥ってしまっている中で、厳しいという現状があります。もう3年目になりますが、私は中学3年生の塾などに行けない子たちの学習支援に関わっていきまして、週に3回ほどいろいろ勉強を教えています。この子たちは3年間コロナ禍にあります。それはどの世代の子もそうなのですが、今の中学3年生と3年前の中学3年生を見たときに、それぞれ学年のカラーがあって、何か特徴的なものがありますが、明らかに体験不足、それからコミュニケーションが足りていないということを感じます。今ちょうど私立入試が終わりましたが、1月から面接の練習などもしています。語彙力が不足してきて、声も小さくなっています。様々な面で、この3年間を過ごした年月は重たかったらうと思います。

3月に突然休校措置が取られ、4月からは学校もあつたりなかつたり、学校行事もない、いろんな体験活動もない、学習もオンラインになったり。もちろん高校も大学もそうですけれども、これが非常に子どもたちの生育にとって大きい罪なことだったと思います。これは誰のせいでもないのですが。

このアクションプラン4年間ということですが、ここに書いてあることはまだ骨子ですよ。皆さん方が共有しておられる前回の8月の会議の時にもたくさん出たものが基盤になって細かい施策がこの下に入っていくと思います。ぜひとも、これまでとは違ったコロナ禍を過ごした子どもたちに対するこれからの4年間の取り組みが何か必要ではないでしょうか。何もなかった時代とは違う、これからの4年間の施策として、コロナ禍を受けた上での施策を何か一つ打ち出すべきではないのかなと子どもたちと接してきて感じました。

学校の先生方もコロナ禍でとても苦勞していらっしゃる中で、保護者も含めて地域の方々が一生涯懸命奉仕されているのですが、なかなか難しい。やはりこうして対面して、言葉を交わしながら育てていく、経験を踏まえながら成長していく、人間としての深みを深めていく、幅を広げていく。そういったことは、やはりこの3年間本当にできなかったらうと思っています。ですので、これまでにはない施策をどこかに入れていただくとありがたいなと思います。

それから、いろんな方々の支援ということで、やはり地域や企業、団体などいろいろありますけれども、個人でも様々な形で支援されている方もいらっしゃるって、定年後に、外国語の指導の資格を取られて、ある小学校のベトナムの子どもたちに日本語を教える活動をされている方もいらっしゃいます。また、JR日南線が不通になってしまって、通学が困難になった世帯がある。毎朝遠くから駅まで行ってそこからバスを乗り継いでいくことが毎朝毎朝もうとても大変な状況の中、ある地域づくりの団体が週に何回か交代で、家族の代わりに子どもたちを拾って、そこまで送る活動をしていると聞きまして、私も知らないことがたくさんあるなと思います。そういう細かいところを拾い上げて、それが参考になって、もしできるものであれば、それを広げていけるような発信、共有をしていくことが必要ではないかなと思いました。

人権については、もう本当に幅が広くて、皆さんもう明日がないというような意見も聞くことがあります。いかに寄り添って話をお聞きし、適切なアドバイスができればと思い、日々自分たちも勉強であります。ただ、どの人も生きる権利があるし、それを守られる権利がある。それを孤独にならないように繋いでいくということが、いかに大切かを身にしみて今感じているところです。

○藤本部長

はい。ありがとうございました。時代の変化、その一言で終わらせたいいけないと思いながら、コロナ禍が拍車をかけて、ますますコミュニケーションが取れなくなったのが現状かなと思います。

文化芸術関係も含めて中村副部長いかがですか。

○中村副部長

人づくりはなかなか数値化が難しく、成果とか評価をはかることが大変難しい分野かなと思いますが、その中で最たるものが文化。指標、成果が5年先10年先というところになって、結構難しいところかなと思っております。

そのためだと思うのですが、一昨年、せっかく国文祭・芸文祭が開催されて、県内全域の文化活動ですとか、あと障がい者の文化活動、共生社会を目指して様々な活動が活発化するかなと思った矢先、コロナの直撃を受けてしまいまして、なかなか活動を継続することができない。特に既存の文化団体ですと、どうしても高齢化が進んでしまって、コロナ禍だから活動そのものをやめてしまうという方たちも増えていると聞いております。

その一方で、今若い子たちがすごく面白い文化活動を始めておりまして、確か宮崎大学の学生さんと記憶しておりますが、青島の海岸の砂浜に短歌を書いて、その書かれた短歌が波で消えていく、その儚さを楽しもうというイベントを開催した学生さんがいました。そのような、これから何か楽しいことを始めよう、面白いことを始めていこうという若い世代の人たちをどんどん応援することができれば、この文化、鑑賞の機会を充実するとい

うこととともに、体験する、参加する、自ら何かを行っていくということを支援して、そういう機会を充実させていくことも一つの文化の充実というところになっていくのではないかと、最近の若い子達を見ながら思っているところです。

○藤本部長

はい。ありがとうございました。お1人ずつ発言をいただきましたので、少し肩の力が抜けたかなと思います。10分ほど休憩を取って、後半という形にしたいと思います。

○藤本部長

はい、では、後半を再開したいと思います。

人材の育成・活躍の分野の中でも、例えば子育ての部分や家庭教育の部分、あるいは女性が働きやすい職場や障がい者の就業など、そういったところもお話ができたらいいなと思っております。

そういった観点から、どなたでも構いませんが、またお話をいただくと良いのですが、いかがでしょうか。松本委員、お願いします。

○松本委員

先ほど少し甲斐専門委員と話になったのですが、やはり子どもと親がセットであり、今PTAの中でも、親の教育って必要だよねという話になる。学校でどんなに楽しい思いをして家に帰ってきても、中にはほっとできない家庭環境があるので、その親がゆとりを持って生活できるような対策も必要なのかなと感じています。

○藤本部長

はい、ありがとうございます。資料の中に、地域の子育て支援体制と記載がありますが、事務局の方で何かありますか。

○事務局

はい。ここの言葉のイメージは、子育て支援拠点や放課後児童クラブなどを想定していますが、今松本委員がおっしゃった親の教育というところは前回の部会の中でも御意見をいただきまして、まず親の教育が大事なのではないかと。家庭での、要するにしつけや子どもの教育ということに、そこから繋がってくるのではないかとという御意見をいただいたので、まだ言葉にはうまく落とせていないのですが、そのイメージはどちらかというと、その下の家庭教育のところに書けないかなと、考えているところです。

どうしても家庭教育というと家庭での子どもの教育になってしまうのですが、そうで

はなくて、我々が今議論しているのはそこもちろんありますが、その前の親の教育をどうアプローチしていけばいいのか。ただ、これがなかなか難しく、そういう親世代にどうやって、どこの部分で繋がるのが良いのかということも考えているところです。

○藤本部長

はい。ありがとうございます。関連して、この話題でいかがでしょうか。

○宮本委員

宮崎県の生涯学習課で家庭教育係が立ち上がったのが平成10年ぐらいで、いろんな施策を打ち出して、ジェンダーフリーと言いますか、女性だけにとどまらず、男性もということでもいろんな講座をしたり、県内全域でいろんな支援事業を展開したりしてきたのですが、それからもう25年ぐらい経つわけですね。なかなかこの男女共同参画にしても、もう30年ぐらいやってきていますけれども、難しいですね。これは社会の体制が変わっていかないと、そういった概念だけでは難しいなということを感じています。

今、特に経済状況が厳しいので、子どもが安心して家庭で過ごせるような環境にないというのは多いと思います。この家庭教育についても施策としていろんな研修とか、男性の子育て講座とかされてこられたと思いますが、なかなかそれが幅広く浸透していかない。人権擁護委員協議会の方では、やはり女性の人権を確立するためのいろんな活動もしているのですが、その中で男性への啓発をやっていこうということで、企業と連携をして人権に関わる講座の充実に向けて、動き始めようとしているところではあります。

ですので、本当にその施策事業だけではなくて、いろんなところが絡み合っていていけないといけないと思いますので、一概にこれということとは言えないのですが、随分前からやっておられますが、なかなかこの成果が見えてこない。それは今の社会状況の中で大変厳しいところがある。

しかしながら、やはり地道に頑張っておられる方がいらして、先ほども言いましたけれども、いろんな活動をしていらっしゃる方々の声を拾い上げて、そこからヒントが得られて、地域ごとに根差した何かができればいいのかと思います。やはり上からではなくて、そこら辺の井戸端会議などでもいいですので、そういったことでほっとできる空間であるとか、語らいの場であるとか、愚痴がこぼせる場であるとか、そういったものを少しずつやっていくといいのかなと思います。

○藤本部長

はい、ありがとうございます。もう少しその保護者や、いわゆる親ですね。親の教育、親がどうかとか、何かこの辺で御意見ございませんか。お願いします。

○甲斐専門員

また私の活動の中からですけれども、親の教育もすごく大事ですが、それと同時に、お金の教育。親がそういった教育を受けていないがために、親の好きなもので世の中回ってしまっていて子どもに行き渡らないということもあるので、これは骨組みとして出されていると思いますが、その下の段階で親の教育とお金の教育は入れていただきたいなと思います。

あと、1歳児健診、3歳児健診、小学校入学などのような節目のときに、親御さんにこういった教育が少しでもできればいいのかなと考えてはいたのですが、小学校が6年間という長い期間で、その間にこういったアクションが起こせるのかなというのを考えてみました。私もまだ一番下に小学校2年生の子がおりまして、家庭教育学級とかに参加することもあるのですが、参加しないで帰られる親御さんが非常に多い。自由参加となっているからそうなのかもしれないのですが、国の方も学び直しと言われてはいますけれども、親自身に意識がない御家庭がすごく多いということに問題を感じております。

その接点になるのが、私たちの活動ですと、食料品をいただけるなら行くよ、ということで人が集まってきます。何かの対価で集めるしか、今、私たちも考えつかないのですが、何かメリットがないと動かないという若い親御さんが多いので、そのメリットを何にするのかというところかなと思います。

○藤本部長

はい。ありがとうございます。PTAの活動としてはいかがですか。最近の現状といますか。

○松本委員

現状としてはコロナというのがとても邪魔をしていて、各単位PTAでも活動できていない学校が多数あります。そうするとPTAっていらぬのではという話にどうしてものなる。でも、子どもが入学すると親もセットで学校と関わっていくことはとても重要なことだと思うので、PTAがいらぬというのは少し違うのかなと連合会の中でも話になります。

どうやって興味のない保護者に興味を持たせるかというところに視点が行くのですが、どうしてもPTAはボランティアな団体なので、強制もできず、集まる人はほとんど同じということになりがちですが、そこを興味が湧くような内容で活動するなど今模索している状態です。

○藤本部長

ありがとうございます。ウォーカー専門委員、大学も今はもう保護者がどんどん出ていられているというような話も聞いたりしたのですが、いかがですか。

○ウォーカー専門委員

現状としてはPTAのような存在はないので、保護者が何かを言うてくるときは問題があるときだけで、自分の子どもはどうだとか、成績どうのこうのはありますけれども、PTA的なものではないです。

ただ、いろいろ話を聞いていると、いろいろ望んでも大勢の人は絶対来ないと思います。やる人はやります。だからテストケースをまず作っていくしかないのではないかと思います。やっているのかとか、なるほどと気付いてくれれば、広がっていくのかなという気がします。もし、この子育てとか、地域の教育とかに真剣に取り組んでいけば、PTAとの連携がとても大事ではないかなと思います。そこで活躍している人たちは、意外と引っ張る。周りの人たちを巻き込ませることができると思います。そこが重要な役割になるのかなと思います。

学びの場をどうやって作るかという課題もたくさんあるのですが、2024年に夜間中学校ができます。これは公立の夜間中学校になります。ただ、私が思ったのは、夜間中学校の教員をそこに配置しても、いろんな方が来るし、いろんな問題が発生してくるので、教員だけでは絶対成り立たないことがたくさんあるわけですね。そういう点でも、地域と教育に関しては、周りの地域の方々を巻き込んでいくしかないのではないかな。特にとても活動力のある親をいかに引っ張っていくか、ということが必要じゃないかと思います。

○藤本部長

ありがとうございます。同様に、鮫島委員いかがですか。

○鮫島委員

もちろんPTAはありません。ただ少し話がずれるかもしれませんが、中国の古典で孔子や孟子が、余裕綽々でないとかかなりのことはできないと言っておられると思います。

医学部の教育に40年以上携わってきているのですけれども、そこで何が起きているかということ、入学した後に決して最先端の医療は学ばせない。なぜかということと最先端の医療は5年経つと変わっているかもしれない、10年経つと間違いだったかもしれないということがあるので、コアの部分をしっかり勉強してもらう。最先端の医療は臨床で、そういうものがあるということと接しますけれども、マストとしてはそういうのは省かれています。コアができていると、応用が利くということになる。これはすごく変な表現になるかもしれませんが、国立大学系の医学部に入って勉強したいという人たちはある程度選抜されている、余裕があるという形なのでそういうことができていられるのかもしれません。

さらに言えば、医学部に入って勉強のマストで必ず入ってくるのは、熱が出たり、体調が悪くなったりすると人を思いやる心がなくなる。きつい、やめてくれって言いたくなるということを経験していただく。なぜかと言いますと、自分たちが対応する患者さ

んは、病気によって正常な判断ができないし、ものすごく怒り狂っていたり、どうして自分がこういうことになったのか、自分だけどうしてこういう貧乏くじを引いたのかと思っている方がたくさんいる。それに対してどのように対応しないといけないか、How Toというものではないのですが、結局そこで初めて道徳とかを皆さん学んで、中国の古典を勉強しなさい、ゲーテを勉強しなさいという状況になってきます。

翻ってみて、お母さんの教育もお父さんの教育もというのであれば、いつでもいいので、そういう教育を早い段階からどこかで始めたら、50年経てばそういう社会ができてきます。

それから、これは文科省の問題かもしれませんが、教育委員会は東京大学に何人入れたかということが評価される、学校の先生は東京大学、京都大学に何人入ったということも評価する。本当にそれでいいんですかということをもう1回考えてもらおう。むしろ、フランスでやっているように、時計職人になりたいという学生が時計職人になったらそれも評価しますよというような世界ですね。大きな話になってしまいますが、そういういろんなことをするとき、では宮崎はどこから始めますか。自分たちで、こういうことから始めようというのは多分しないといけないのかなと思います。

STEAM教育とかグローバル教育とか、あるいはiPadを使う、使わない。それは流行ですよ。その流行は、追いついていける人は追いついていきますけど、10年経ったらまた変わっているわけで、本当にそれをずっと追い求めて、幸せになれるのかどうかというのは、60、70になるとわかってくるわけじゃないですか。そこをどのように教育するかというところかなと思います。

ただ、未来を創る人材として、応用力のある、いろんなところに適用できる人というのは、最先端しか学んだことのない人では決してない。もっと基本に戻って何かできるような人、そういう人だろうと思います。難しい問題だと思いますが、以上です。

○藤本部長

はい。ありがとうございます。良いお話をいただきました。

まだ、ここの中でもいいのですが、他の部会も結局人が全部関わってくるのではないかと思ったところでした。この人づくり部会以外のところでもよろしいので、いろんな質問や御意見をいただければと思いますが、いかがでしょうか。

○宮本委員

この①の子どものところで、地域の子育て支援体制、それから家庭教育・幼児教育とかもありましたけれども、小学校から生活で、以前とはまた違った内容の学習を子どもたちが小さいときからたくさんしていますよね。家庭での役割ということも勉強していますし、消費者教育、金銭教育いろんなことをいろんな分野で勉強するようになっているのですが、特に小学校の場合、先生が1人で全部担っていますから、深くということがなかなか

か難しい。そういうところで、やはり外部の支援者を入れ込んで、一緒に授業を作るという取り組みに徐々に今なっていると思うのですが、そこをもっと強化して、もっと専門的知識のある方々を学校に取り組んで、一緒にT T（チーム・ティーチング）していけるような仕組みを進めていかれるともっといいのかなと思います。

文科省は先駆けていろんなことを教科書で盛り込んでやっていますけれども、なかなかそこが厳しくて、そういうことができていないのではないかなと。先ほど部会長が言われました、新しいものが入ってきた時に教員は追いついていかない。

英語の先生方が昔、ALTの方々が入ってくれた時に英語が話せない。テープレコーダーを持って英語の授業をされた方々が、生の外国人の方とコミュニケーションが取れなくて、それでも授業をしなくちゃいけないというところを見てきましたので、厳しいだろうなと思いました。

だから、そういった専門的な分野の方々を学校に取り込んで授業ができるような、それが地域の子育て支援体制にも生かせると思いますし、家庭教育・幼児教育、将来の大人として成長していくための資質を養うための施策として何か項目でも盛り込んでもらうといいのかなと思いました。

○藤本部長

はい。ありがとうございます。小学校の生活科ですね。はい、松本委員。

○松本委員

質問ですが、コミュニティ・スクールが結構広まってきていて、宮崎市は令和5年度に全小中学校でコミュニティ・スクールを運営していくのですが、それは②に入ってくるのでしょうか。

○事務局

はい。今この中にコミュニティ・スクールの言葉は入っていませんが、今のイメージでは②の中に書き込もうかなと思っています。

○藤本部長

はい。松本委員よろしいですかね。ありがとうございます。

○ウォーカー専門委員

少子高齢化は皆さん御存知ですけれども、この③のところの高齢者の就職機会。結局、年をとって1回仕事を辞められて、再雇用で仕事ができるかもしれませんが、これから年金などで生活していかないといけない中で、再雇用の時には給与が半分というような状況が続いていますよね。これから高齢者の方の就業に頼らないといけなくなって

くるにもかかわらず、そういう生活ができないような給与等になれば問題かなという気がしまして、これはこちらの部会で解決できるものではないかもしれないですけども、大きな社会の課題かなという気がします。

それと、別のところで質問で、Ⅱの希望ある未来のところで、主な指標に災害時受援計画がありますけれども。いつ災害が起きるかわからない、気候変動でいろいろ問題が発生しているのと大きな地震が起きるかもしれませんということが言われている中で、この災害については、もう少し意識を高めていくような活動をしていく必要があるのではないかと。

御存知だと思いますけど、宮崎港の辺りに、たくさん家が建っていたり、開発されたりしていますが、そこに大きな津波が来たら全部なくなりますよ。誰も意識しないのかなと思うぐらいの勢いで開発がされています。そういったところの矛盾、まちの開発計画と災害対策にどこまでしっかりと取り組んでいるかと。もうされているかと思いますが、そこについてお聞きしたいなと思います。

○藤本部長

いかがですか。答えられる範囲で。

○事務局

少し難しいものでありますけど、おっしゃるとおり、一方で災害があり、一方で日々の暮らしがあります。そのバランスの取り方だろうと思います。例えば、今おっしゃった港の辺りの住宅の関係で言えば、市の方がエリアを設定したりしている。一方で、ハザードマップを作り、どこまで津波が来れば浸水しますよ、というものを出しながら、その都市計画等で住めるエリアとか、ここまでの住宅はいいですよ、というような設定をしているわけです。

説明は少し難しいのですが、一義的には、市町村がまずは考えている部分はあると思います。ただ、それを俯瞰して見たときに、整合性が取れているかは、すみません。誰が判断しているかわからないので、どこまで反映していますよ、もしくは反映できていませんよ、とそこまで私把握していませんので言えませんが、そうあるべきであるというのはおっしゃるとおりだと思います。

○藤本部長

はい。ありがとうございました。お願いします。

○松本委員

私は看護師として働いているので、高齢者が生きやすい社会づくりが大事だと思って

います。今の自治会制度とかも考え直さないとかみ出しの問題とか、どんどん年老いていく方たちがかなり苦勞されている。何で自治会があるのかな、辞めたいと言う高齢者の方たちもいらっしやる。3人に1人が高齢者なので、高齢者の方が幸せに年老いていくような宮崎であって欲しいなと思います。

○中村専門委員

今の高齢化に関連してですけれども、この会議の最初の頃からずっと事務局の方から20年後の宮崎という形でお話をいただいている、自分が20年後いくつになるのだろうか考えたときに、そうかそうかと思いつつ、今松本委員がおっしゃったみたいに、宮崎で幸せな老後を通して、幸せに死んでいくということはすごく大事なことだと思っています。20年後の私が幸せに死んでいけるのだろうかというのは最近考えるようになっている。

晩婚化や結婚しない人たちが今とても増えていて、その人たちが年を取っていく。その人たちがどういう老後を迎えるのだろうかということで、幸せな老後を宮崎で過ごせるということを発信できれば、移住先として宮崎を選んでいただくという選択肢もあるのではないのかなと考えているところです。

例えば、お年寄り1人で家は借りられないとか、それは本当に仕方のない事情があるのでしょうかけれども、家を借りられないお年寄りの行き場所がなくなっている。だから、安いアパートに住んで孤独死していく。そういう悲惨なイメージを持たない宮崎県になってくれているなら、私は20年後安心かなと最近つくづく感じているところです。

○藤本部長

ありがとうございます。気持ちとしてはよくわかりますね。私も退職して、しばらくしたら年金生活になりますけど、どうしようかなと思うところがありますね。米良委員、何か考えをお持ちだと思います。お願いします。

○米良委員

一言で切ったらいけないのですが、それは自分の努力ですよ。自分の努力を人に委ねる、もしくは官公庁に委ねる。それは考えられない。それなら自分はない。自分がない人生を送って、それなら今終わったらどうですか。とんでもないことを言いますけれども、自分の幸せ、自分の終の宿は、自分が責任を取らないと人の問題ではない。自分の問題です。自分の問題を人に委ねる、私の論理はありません。

例えば少し話を変えます。昨日、女子マラソンを見ていまして。全体では3位、日本人では1位の方、名前は意識的に忘れまして。なぜかと言うと、30キロまではペースメーカーの方と一緒に走っていらっしやるわけですよ。そして、後のインタビューで30キロまでは実に気持ち良く走らせていただきましたと本人は言っている。その後、12.195キロを自分のペースで走らなければならない。それでは、30キロ無駄になったという話で

すよ。自分の積みあげ、もしくは、自分で作っていくということが。

せっかくペースメーカーの人が、今は温度が何度でという環境状態から何から全部自分の頭の中に叩き込んで一緒に走っていらっしゃる。そこまでしているのに、その走っている人はおんぶにだっこ。ただついていっただけ。4分の3を指導していただいたから、最後の4分の1は自分でやってみると。そしたら、崩れていく。これ歴然とした日本人だなと思いました。何のためにペースメーカーの人がいたのか。

また違った話。日本は海に囲まれた地形で、とても安全です。ウクライナはどこを見ても地続き。国境はわかりません。国境が定まったのはつい最近で、人や動物は全部どこにでも自由に行けます。それがヨーロッパやアメリカ、大陸です。そういう中で日本は、海に囲まれていてとても安全ですよ。言い方を変えると危機管理がない。

例えば、カリフォルニアでこの1か月の間に、銃乱射が3回あって、何人も亡くなっている。でも、東側のニューヨークでは話題にもなっていません。よそのことだ、とアメリカですらそう。日本はもっとそうです。では、日本の中で危機管理とは何ですか。それは競争しかない。今の子どもさんは運動会に出ると、3人並べて御苦労さん。我々の頃は3冊2冊1冊。鉛筆が3本2本1本です。その競争の中で培ってきて、残っていると思っています。途中で諦めた人、挫折してもついてきた人。どうにか救わなければならないというのは当然わかります。人口減に向かっては特にわかります。

だからと言って、競争の論理がなくなるというのは、いかばかりかと思います。日本という国は資源がない。人間は資源だと習いました。今そんな暴言を吐けば叩かれますが。けれども、日本という国はそういう国。例えば、我々の業界でいうと半導体がありません。中学校時代の社会や地理では、日本は加工貿易国だと習いました。今その論理を取ってくると、いつの間にか日本は半導体を加工貿易にしている。コピーはできても生産性、オリジナリティがない。だから、どこかの国の追随にしかねない。

だから日本の中で、文化という言葉、もしくは生産性という言葉、もしくは競争という言葉についての根幹の討議もしくは教育。Plan・Do・CheckのCheckがあるのでしょうか。Doはあるのでしょうか。Planはあると思います。行動を起こしてCheckする、それがないと、つらいところがあります。そのCheckをするときに、みんなで加勢して助け合って、それが競争だと思っています。それが先ほど言われました、ゆとりある教育、ゆとりある親、もしくは孤独にしないという沿線上かなと思ったりもします。けれども、やはり競争が必要です。その中から生まれてくる1番2番3番というのはつけなければならないということになる。

親の教育が大事、親と子どもは1対だという皆さんの話を聞きました。とても今反省しています。うちの会社は従業員が今550人おまして、その会社とは別会社のところがこの1月2月3月というのは追い込み時期で、日曜日こそ休みを取れますけれども、他は全部残業。親子1対と言われたら、これはまずい。1対になっていない。これをどうやってフォローするかというのは今から考えてすぐ手を打ちます。

2つ目です。先ほど言われましたけど、コロナ禍になって中学校のお子さんのコミュニケーションが足りない、特に声が小さい。今年4月に28名入社してきます。研修を1週間して、11月までに配置しますけれども、この1週間はカラオケ大会ですね。やり直しだなど。会社の社歴とか、こういう仕事をしているとか、商品とか道具とか1週間みっちり研修があります。それを見直して、どこかでカラオケ大会にしないといけないと思います。とても良い勉強になりました。これは誰が悪いわけでもない、どこにも責任はない、不可抗力です。それを追求しても仕方がない。

また違う話になりますけど、もう一つ問題。例えばここにいらっしゃいます部長と主幹。多分この会議に参加されるのは今日が最後でしょう。部長は定年、主幹は異動。前回の会議から5か月経っていますので、次に来た時には誰となっている可能性があります。何が言いたいかという藤本部長と中村副部長が軸になってくる。部長と副部長が、逆に事務局側に情報と教育とコミュニケーションを取らないといけない。けれど、これが現実。だから、現実を踏まえながら人づくりをしないといけない。

時間と、それから作り上げることと、Plan・Do・Checkということと、人間は所詮だとは言いませんが、そういうような事柄の時間との戦い方もありますので、この人材、育成というところの価値観、もしくは役目をきちんとしながらコマを進めていきたいというのが、私の言い分であります。すみません。口が悪くなりました。

○松浦総合政策部長

はい。今度定年になります。今日、様々思っていることを聞かせていただきました。僕らは僕らで継続はしていくところではあるのですが、これを行政の施策の中にどう取り込んでいくのかということになったとき、出てきた事業というのは皆さんの意見が入っているのだろうか、入っていないのだろうかというような状態だろうと思います。ですので、実際にやっていく事業と皆さんの御意見がストレートに繋がるということはありません。こういった仕事に10、20年近く携わってきているのですけれども、実際の皆さん方の意見、こうあったらいいよね、こういうところが問題だよねということ僕ら行政がわかった上で進めていく。それが一番大事ではないかなと思っています。

その中でも、先ほど米良委員の方からは、老後はそれぞれの責任ではないかという御意見がありました。それはみんなわかっておられると思います。私もそう思っていますけれども、この計画というのは皆さんの意見を集めて、行政だけではないところの思いを踏まえた上で作っていきたいと思っていますので、そういう意味では幸せに死ぬる社会というのは大事だなと思っています。

ただ、生活保護や年金などで、経済的に苦しいという人たちもたくさん増えていると思います。こういった問題については、何らかを変えていかなきゃいけない。働ける人は働いてもらうから当然の話ですけれども、もう働けなくなって、でも苦しいという人たちも、たくさん増えてくると思いますので、そういったものもしっかり考えながらやっていく

べきだと思います。

これは行政の責任でもあると思いますので、そういった意味では先ほどの御意見もすぐではないかもしれませんが、しっかり頭に置いて施策を作っていく必要があるというところがございます。何か皆さん方の思いをしっかり受けとめて、そういう姿勢を僕らが持ち続けることが大事ですので、今日の御意見をしっかりと僕らの中で咀嚼して参りたいと思います。

○藤本部長

はい。ありがとうございました。以上で、議事の方は終わりたいと思います。事務局にお返しします。

○事務局

はい、長い時間ありがとうございました。

連絡事項をお伝えいたします。次のこの会議については、3月下旬から4月上旬頃を予定しておりますが、また細かい日程が決まりましたら、改めて御連絡いたします。

それから、本日お配りしている資料について、特に計画のような重い冊子は置いていただいても結構です。また次回配布いたします。

以上をもちまして、第4回総合計画審議会人づくり部会を閉会いたします。どうもありがとうございました。